# 清須市清洲城下町遺跡
# 発掘調査説明会資料

令和４年４月18日（月）

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

Ａ区１面の写真撮影直前の調査風景（北西より）

## １．清洲城下町遺跡の発掘調査について

清洲城下町遺跡は、五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世にかけての遺跡です。遺跡の中央には、名古屋方面の南南東から北北西にのびる美濃街道がはしっており、美濃街道と五条川が交差する北側に清須城の本丸跡が想定されています。

今回の発掘調査は、県道名古屋祖父江線に関わる清洲橋の橋梁整備工事にともなう遺跡の調査で、五条川右岸をＡ区、左岸をBa区～Bd区に分けて調査をしました。

## ２．発見できた遺構

今回の調査では、古代（約1,400年前～1,200年前）の自然流路１条と戦国時代から江戸時代前期初頭（約500年前～約400年前）の溝15条、土坑16基を確認することができました。

調査区の位置

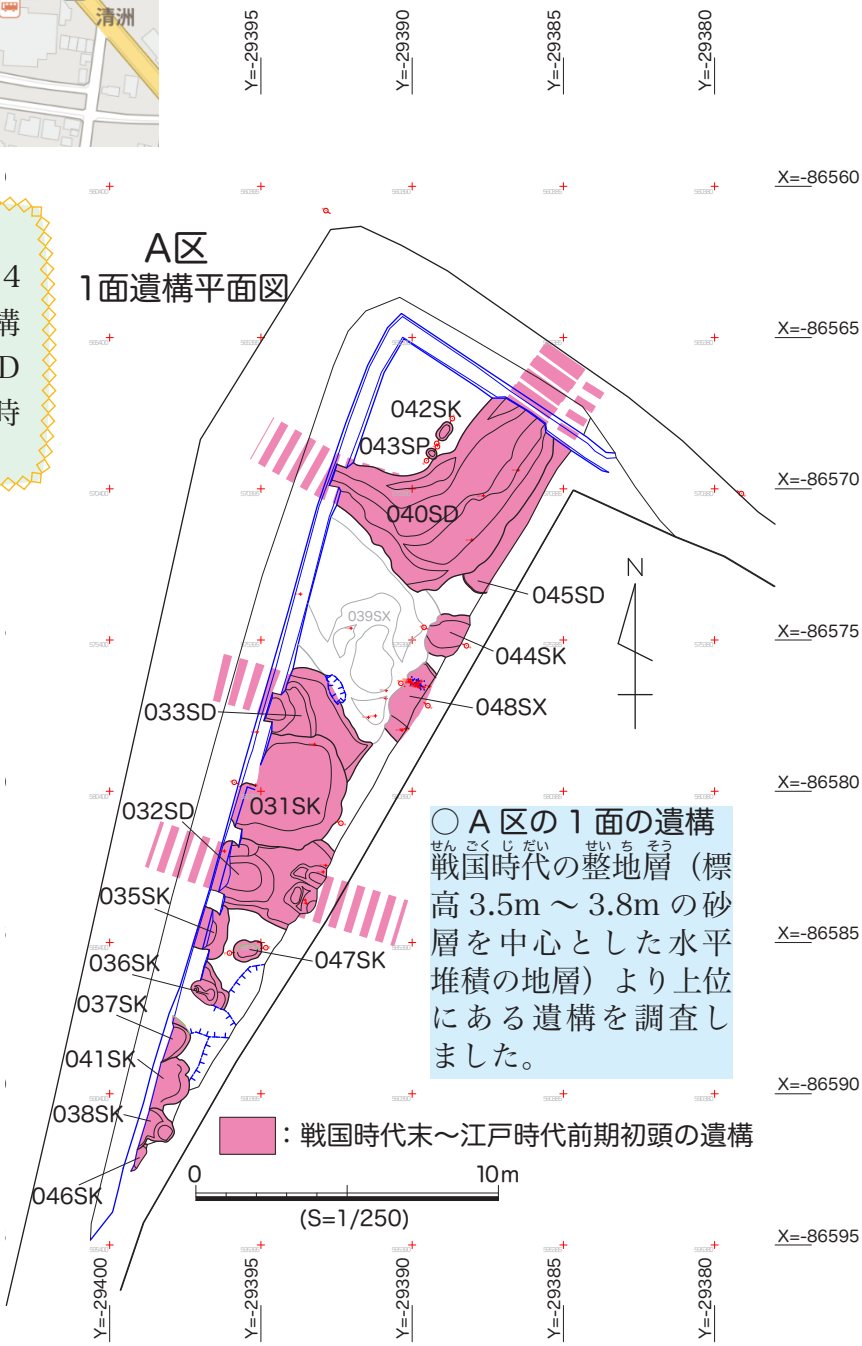
A 区 1 面全景（南東より）

○ A 区の 1 面の成果

戦国時代末～江戸時代前期初頭の溝 4 条と土坑 10 基が見つかりました。遺構の分布から、032SD・033SD・045SD のある時期から 040SD と土坑のある時期へと変遷します。

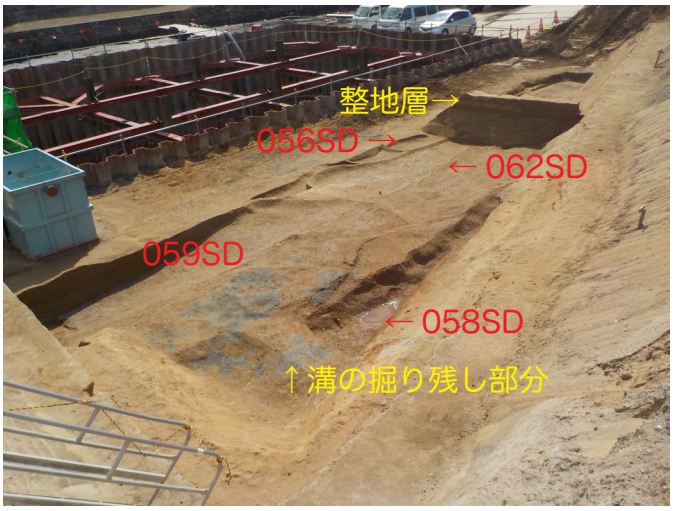
A 区 1 面南側（南西より）

A 区 1 面 040SD（南西より）

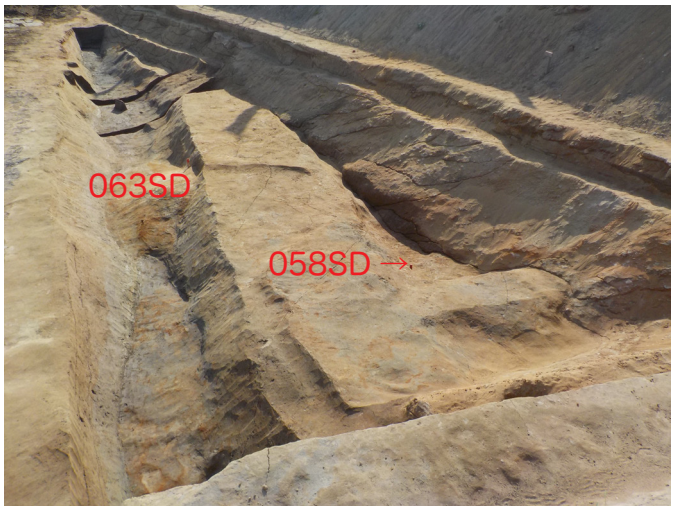



○ A 区の 1 面の遺構

戦国時代の整地層（標高 3.5m ～ 3.8m の砂層を中心とした水平堆積の地層）より上位にある遺構を調査しました。




A 区 2 面北側（北西より）




A 区 2 面 063SD（北より）

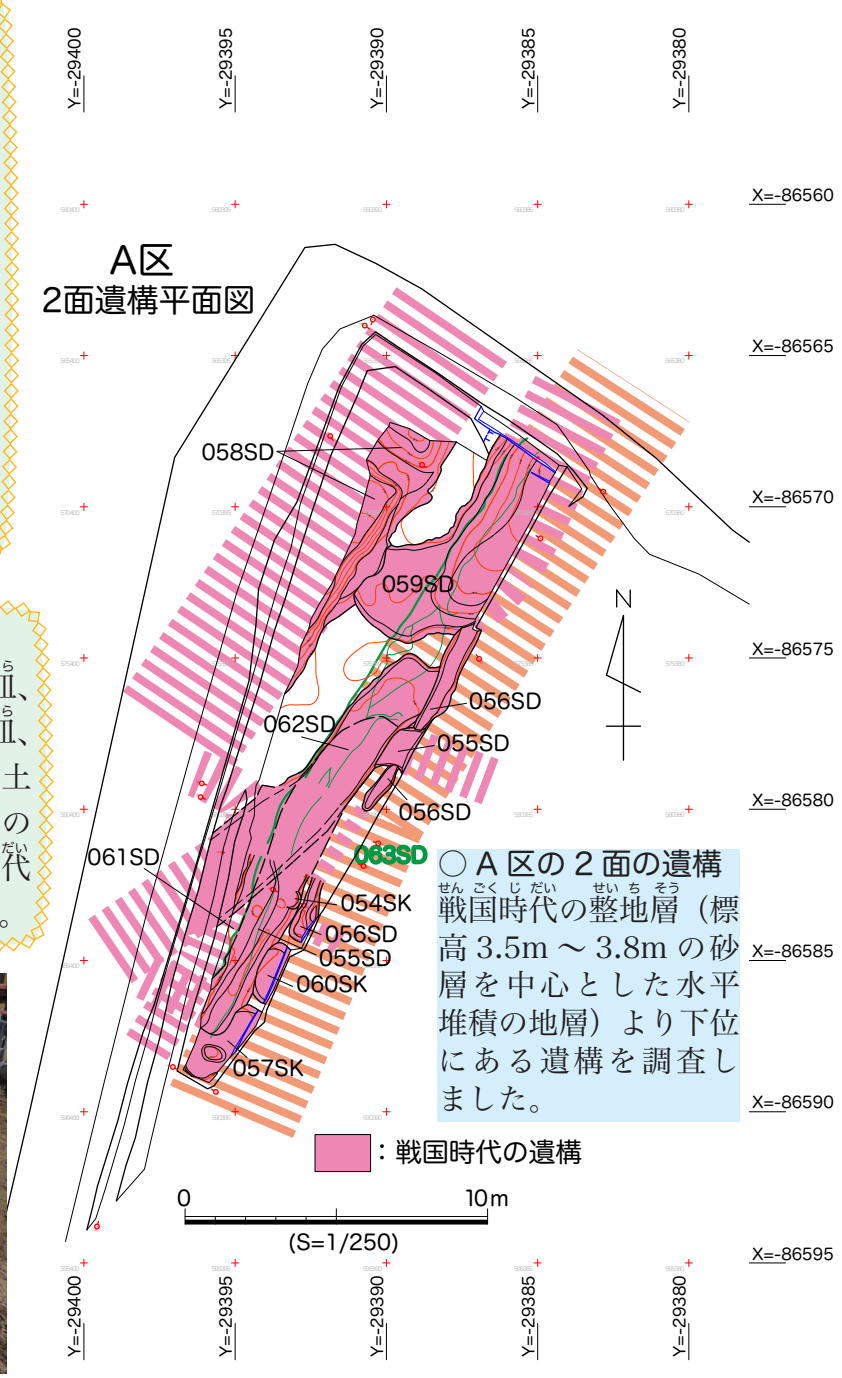
## ○ A 区の 2 面の成果

戦国時代の溝 7 条と土坑 3 基が見つかりました。最も古い 063SD から 061SD、056SD、055SD と 059SD、058SD、062SD へと変遷します。どの溝も掘り込み面の高さからは深さが 1m 以上、幅が 2m ～ 5m 程の規模になるものです。土坑 057SK と 060SK は、061SD より新しく、055SD より古いので、056SD の存在した時期にあたるでしょうか。

## ○出土遺物

今回の調査により、天目茶碗、灰釉皿、鉄釉壺、灰釉壺、擂鉢、土師器の鍋・皿、常滑産甕、瓦、山茶碗、小皿などが出土しました。瓦は Bc 区 020SD や A 区の 1 面の遺構から出土しており、戦国時代末以後の時期を表すものと思われます。

A 区 2 面南側（南西より）




## ○ A 区の 2 面の遺構

戦国時代の整地層（標高 3.5m ～ 3.8m の砂層を中心とした水平堆積の地層）より下位にある遺構を調査しました。

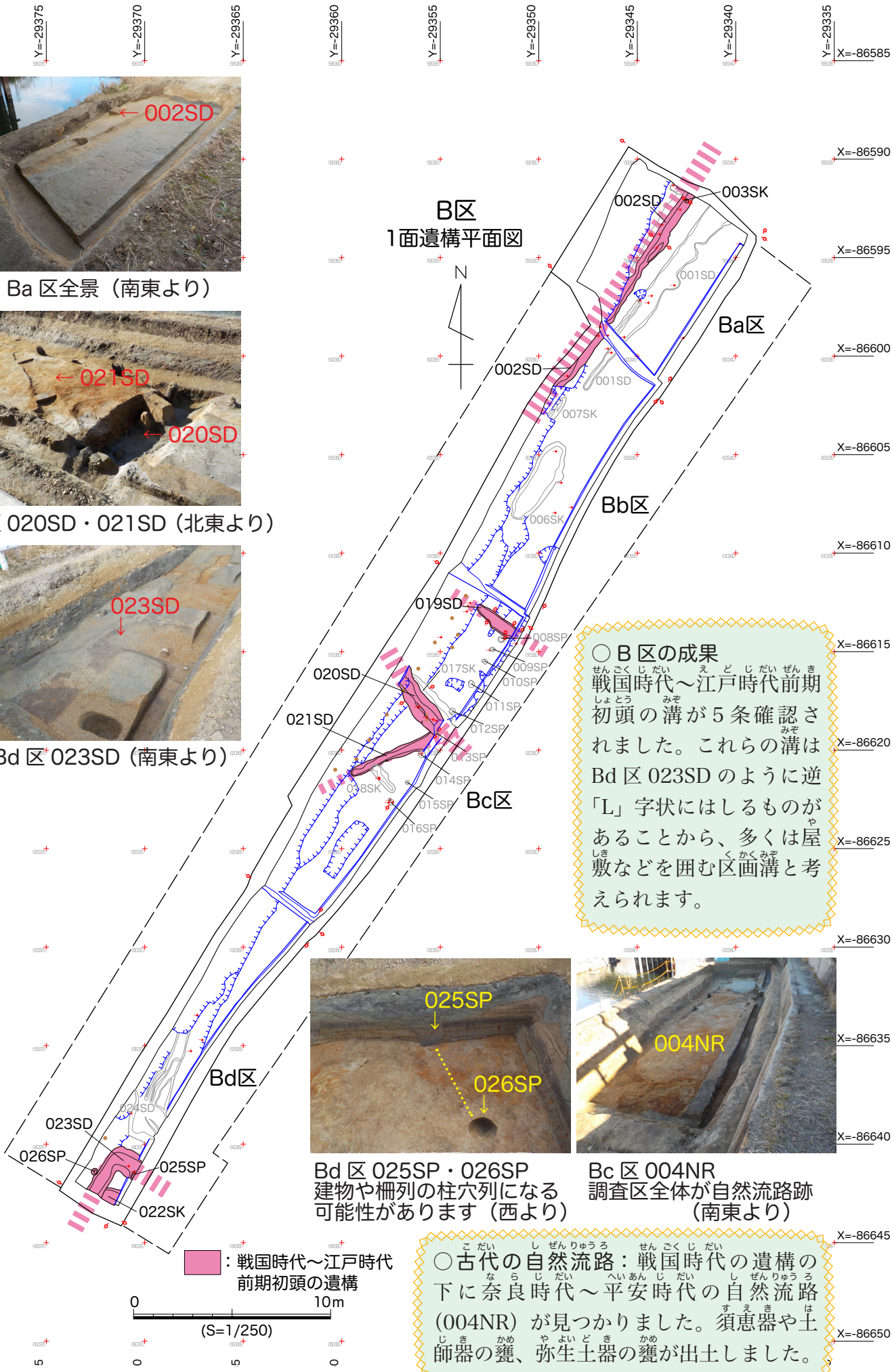
Ba 区全景（南東より）




Bc 区 020SD・021SD（北東より）




Bd 区 023SD（南東より）




○B 区の成果

戦国時代～江戸時代前期初頭の溝が 5 条確認されました。これらの溝は Bd 区 023SD のように逆「L」字状にはしるものがあることから、多くは屋敷などを囲む区画溝と考えられます。




Bd 区 025SP・026SP
建物や柵列の柱穴列になる可能性があります（西より）




Bc 区 004NR
調査区全体が自然流路跡（南東より）

○古代の自然流路：戦国時代の遺構の下に奈良時代～平安時代の自然流路（004NR）が見つかりました。須恵器や土師器の甕、弥生土器の甕が出土しました。

これまでの調査とＡ区・Ｂ区（1：750）

**まとめ**

清洲城下町遺跡は、これまでに多くの発掘調査が行われ、江戸時代の古城絵図などを参考に戦国時代のおおよその姿が復元されています。今回の調査地点は 16 世紀末～ 17 世紀初頭における清洲城下町遺跡の中で、本丸の北北東で中堀の内側にある武家屋敷地の推定域に当たります。その一部を確認できたのみではありますが、確認された遺構の状況から、周囲の地区より比較的標高の高い微高地上に営まれた遺構と考えられます。よって、今回の調査で確認された遺構と出土遺物は、五条川（当時の清須川）に面した城に関わる何らかの施設やその施設で営まれた活動の痕跡を反映したものと思われます。

発掘調査の期間中は近隣住民の皆様と関係機関の皆様にはご理解とご協力を頂き、誠にありがとうございました。

Ba 区遠景（北より）

Bc 区溝 020SD・021SD 調査風景（北西より）

Bc 区自然流路から出土木材の調査（南より）

Bd 区遠景（南より）

A 区 1 面の調査風景（北西より）

A 区 1 面の溝 032SD の調査（南西より）

A 区 1 面の土坑 035SK の調査（南より）

A 区 2 面の溝 063SD の調査風景（北西より）